Charlotte　性転換(ＴＳ)ＳＳ

ゲキガンガー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Ｃｈａｒｌｏｔｔｅのキャラがある能力者によって性転換したという設定の話です。

同人誌として配布予定です。詳細はまだ発表できませんが。

完結まで一日一話は更新すると思います。

目次

登場人物設定＋第一話 ―― 1
第二話 ―― 11
第三話 ―― 17
第四話 ―― 24
第５話 ―― 37
第６話 ―― 51

登場人物設定＋第一話

登場人物。

乙坂有菜（おとさかゆうな）乙坂有宇の女バージョン。相手に乗り移れる。5秒間の時間制限は物語の進行上邪魔になりそうなので削除します。

星ノ海学園には当初から入学している設定。その他に家族がいて、弟の歩（あゆむ）と、隼子（じゅんこ）がいます。

原作でいう隼翼に対しての記憶を失っていてという設定は削除します。

隼子は同じ学園に三年生として通っていて、生徒会長をしています。

友利奈緒貴（ともりなおき）友利の男バージョン。対象一名だけの透明化能力というのは使いづらそうなので普通に透明化能力にします。

こんな能力あれば女風呂でも覗きそうな設定に思えるのですが、元の友利が淡泊そうなんでそういう使い方しなさそう。

姉（原作一希だから一美にしておく）が拉致られて能力者の研究によって廃人になって入院中みたいな原作の設定はそのままでも良さそう。

使えなくもない。

高城花子。原作の名前（丈士郎）が女性名詞化しにくいので花子で。高城の女バージョン。何となく腐女子。よくカップリングの妄想とかしてそう。

能力は瞬間移動でいいや。止まれないとかいうのはどうするかわからない。

西森柚咲雄。ジャニーズに所属している現役のアイドルだが、能力者である事から星ノ海学園に入学してくる。

能力は発火能力で普段は温厚だが能力の発動中は二重人格のように性格が入れ替わる。

原作でいう姉の魂をいたことして憑依させるという設定は使いづらそうなので改変します。

その他のキャラクターに関しては適宜。

この話はシャーロットのキャラが性別反転したらどうなるか、というよくある性別反転ネタです。滅茶苦茶になるかもしれませんが、なんとなく書いてみます。

プロローグ。

それはある日の事だった。

「そう！　俺は世界最強の能力者！　世界創造（ワールドジェネシス）を持つ男だ！」

その日、ある能力者がいた。

「ふっはっはっはっは！　俺の能力をくらえ！　世界創造（ワールドジェネシス）

！」

その日、世界の因果律が改変され、新たな世界が作られた。

そう、世界の全ての男女という、普遍の規律（ルール）がこの男によって改変されたのである。

第一話「転校生は突然に」

私の名前は乙坂有宇菜１５歳。星ノ海学園に通う高校一年生。成績優秀、そして容姿端麗。少し変わった所はあるけど、普通の女子高校生。――その少し変わったところとは――。

ある日の事だった。学校からの帰り道。

「ねぇねぇ、お姉さん。可愛いねー」

その帰り道だった。複数人の男達に絡まれる。いわゆるナンパ男達だった。一目見るだけでもチャラそうな連中だと理解できる。

「俺達とこれからお茶でもしない？」

私は無視して、通り過ぎようとした。

「ちょっと待てよ！　無視すんじゃねぇよ！　このアマ！」

「なんですか？　私に関わると痛い思いをしますよ」

「痛い思い？　なんだそいつは」

「女一人で男複数人に何ができるっていうんだ」
「ちょっと可愛いからって調子乗ってるんじゃねぇぞ！　このアマ！」
血気盛んな男達はすぐに手を出そうとする。
――そう。その少し変わった所とは。
「ぶはっ！」
「てめぇ！　味方を殴ってどうするんだ！」
「ぶはっ！　てめぇ！」
男達は突如仲間割れをした。
相打ちをして全滅。この仲間割れは偶然引き起こしたのではない。私の少し変わったところ。そこは特殊能力者である事だった。私には能力があったのだ。それは『五秒間だけ相手に乗り移れる能力』。
私はさっさとその場を通り過ぎようとする。
「くそ！　てめぇ！　……待ちやがれ！　何しやがった！」
一人のチンピラが立ち上がってきた。
「その辺にしとけよ」
その時。一人の少年が姿を現した。私達と同じ、星ノ海学園の男子の制服を着ていた。イケメンだが、どこか冷たそうだった。クール系と言えば聞こえはいいが。

「んだよてめぇ！　中途半端にイキがってると痛い目みるぞオラァ！　なっ!?　消えた！」

男子生徒は、突如姿を消す。チンピラにはそう見えた事だろう。しかし、私の目から見るとはっきりと見えていた。対象一人だけの透明化能力を彼は持っていたのである。

「ぐはぁっ！」

見えない角度からのアッパーカット一発でチンピラは吹っ飛んだ。

「ったく。余計な手間取らせるなよ」

「ありがとう。友利君」

私はお礼を言った。彼の名前は友利奈緒樹（ともりなおき）という。同じ高校。星ノ海学園の男子生徒にして、生徒会長である。そう、この高校は能力者が集う高校だったのだ。

「別に、礼を言われるほど大した手間じゃねぇよ。じゃあな」

「あっ……」

そう言って、彼はその場から去っていく。彼は不愛想なのだ。

翌日、生徒会での事だった。

「見てください！　乙坂さん！」

突如、眼鏡をかけたみつあみの女子が迫ってくる。彼女の名前は高城花子（丈士郎を

女名するのが難しかった為適当に命名）という。私が所属している生徒会のメンバーだ。

「な、なんなんですか高城さん！　いきなり！」

「これですよ！　これ！」

高城さんは雑誌の一面を突き付けてくる。

そこには背の高いイケメンが映っていた。

「だ、誰ですか!?　この男の人は――」

「知らないんですか!?　今話題沸騰中のアイドルなんですよ！　ジャ〇ーズ事務所所属のアイドル！　名前は西森柚咲緒（ゆさお）っていうんです！」

「はぁ……」

ちなみに私はアイドルには興味があまりない。高城さんは大のアイドルオタクらしい。

「もう、私この西森君の大ファンで！　ライブも何回も行ってて！　ＣＤも何枚も箱買いしてるんです！　それで今度はファン感謝ライブに参加する事になってて、その為にまたＣＤを百枚買わなきゃなんです！」

「そ、そうですか」

熱心すぎて若干引きそうになる。

「それより、乙坂さん。今日、クラスに転校生が来るらしいんですけど、知ってますか?」
「へー。そうなの。初耳」
「西森君みたいなイケメンだったらいいんですけどねー」
高城さんは色々と妄想の世界に旅立っているようだった。
私達はクラスに入る。すると、そこには友利君もいた。友利君は不愛想であまり友達もいない。今も一人、雑誌を読んでいる。
「友利君、この前はありがとうね」
「ああ。気にすんじゃねーよ。別に」
本当に不愛想だ。むかつく奴。女の子がお礼を言ってるんだからせめて視線くらい合わせればいいのに、視線は雑誌からそれていない。
——と、その時だった。先生が入ってくる。
「静粛に。皆、席につけ」
皆、席に着き始める。
「これから転校生を紹介する」
転校生、そういえば高城さんから聞かされていた事を思い出す。一体どんな子なんだろう。
「では、入ってきてくれ」

「はい」
「え？」
　私はその顔に見覚えがあった。というか、さっき見た。あの雑誌に載っていたアイドルの男の子だった。
「き、きゃあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！」
　突如、高城さんが叫び出した。
「た、高城君、いきなり立ち上がるなんて」と、先生。
　しかし高城さんは大人しく聞く様子がない。興奮それどころではない様子だ。
「西森柚咲緒！　西森柚咲緒よ！　間違いない！　ライブで何回も見たもの！　本物よ！」
「ええい！　静かにせんか！　彼は本名を黒羽柚咲緒（くろばねゆさお）という。知っているとは思うが、今ブレイク中の人気アイドルだ」
「初めまして。皆さん。これからの高校三年間よろしくお願いします！」
　礼儀正しいイケメンだった。
「き、きゃあああああああああああああああああああ！　こちらこそよろしくねえええええ！
　柚咲緒君――――――――！

「ええい！　高城静かにせんか！」
「ええっと。席は。乙坂の隣か」
「は、はい！」
「黒羽。乙坂の隣に行きなさい」
「はい」
　さっきのイケメンアイドル――西森柚咲緒。本名黒羽柚咲緒は私の隣に座る。
「な、なんで乙坂さんの隣なのよ。乙坂さんばかり良い思いを。ギギギ」
　ハンカチを噛まれる。
　いや、そんなところで恨まれても困る。
「よろしくね。乙坂さん」
　イケメンアイドルの転校生西森柚咲緒は私に挨拶をする。歯がキラリと輝いている。
「西森さん……いえ、本名は黒羽さんでしたっけ」
「どっちでもいいよ。君の呼びやすいほうで」
　キラリ、いちいち歯が光る。アイドルオーラが全快だった。
「は、はぁ……よろしくね。西森君」
　――その時、友利君は興味がなさそうに雑誌を読み続けていた。
「乙坂君！　なんなんですかその態度は！　人気アイドルである西森君が転校してきた

というのにその態度は！」
「俺アイドルとか興味ねーんだよ！」
不愛想に友利君は言ってのける。
「むきーーー！　西森君に興味ないとか！　非国民です！　非国民！」
「まあまあ、落ち着いて」
と、西森君。
「は、はい。西森君にそう言われたら」
急にしおらしくなる高城さん。
「ははは……」
私は苦笑をする。なんだか賑やかな学生生活になってきそうだった。
しかし――これが私乙坂有宇菜の高校生活の波乱の幕開けに過ぎなかった。
次回第二話「第四の能力者現る！」　乞うご期待！
※続かない

※予定だったのですが、何となく続きます。

第二話

けど、なぜ？　彼が突然転校してきたのだろうか。有菜は疑問に思った。人気絶頂中の人気アイドルがなぜ、転校してきたのか。

あまりに出来過ぎではないだろうか。

放課後、生徒会での活動で有菜は生徒会長である姉――隼子にその事を聞いてみた。

※原作とは異なり、記憶を失っていたりはしないです。隼子は有菜の姉で、生徒会長です。三年生です。

「どうした？　有菜」

姉である隼子は読んでいた新聞紙から視線を有菜に移す。鋭い目付き。長い黒髪だった。どことなく知的であり、学園の制服を着ていなければ女子大生か社会人に見間違えても不思議ではないだろう。

「西森君の事、何か知ってない？」

姉である隼子は生徒会長であるという事以上に、学校政治に深いバイパスを持っていた。学園の影の権力者と言ってもいい存在だった。

「ああ。彼の事か――彼は――」

「あっ。いたいた。こんなところにいたんだ」
——と、その時だった。話題にしていた渦中の人物が姿を現す。金髪の美青年。染色は学園の風紀に違反しないだろうか。アイドルだからやはり特別なのだろうか。
ともかくとして、西森柚咲緒が姿を現す。
「……西森君」
「……いやいや。女子生徒を巻くのに苦労したよ。約一名、巻けなかった人がいたけど」
「スーハー！　スーハー！　柚咲緒君の吐いた空気……スーハー！　スーハー！」
柚咲緒の後ろにはそう言って深呼吸をしている高城さんの姿があった。
「……君、足速いんだね」
呆れたように言う。高城さんは瞬間移動能力の保持者だ。巻くのは無理というものだろう。
「……生徒会室がどこか聞きたかったんだけど、どうやらここがその生徒会室のようだね」
「……なんだよ。キザ野郎。俺達の生徒会室に何の用だ？」
どこからともなく、奈緒樹が姿を現す。恐らくは透明化の能力を使っていたのだろう。
「わっ。びっくりした。いつからいたの」

そう、有菜。

「……最初からだよ」

奈緒樹の能力は透明化能力だ。透明化能力。そんな能力、思春期の男子が得たとしたら何をしでかすかわからない。あんな事やこんな事。こんな事にも悪用できてしまうのだ。

（けど怖い。この人。私の着替え覗いてたりしないよね）

有菜はそう思った。

「心配するな。お前の着替えなんか頼まれたって覗かねーよ」

「人の心まで読めるの！」

「……そんな能力は別にねーよ。ただ顔に書いてるだけだ」

——と。そんな事を今は言っている場合ではなかった。

「それで、どうして柚咲緒君が生徒会室に」

「……僕は生徒会長に用があったんだ。乙坂隼子さん。あなたに」

「……私にか」

「もう知っているんですよね。僕がなぜ、この学園、星ノ海学園に転校してきたのか」

「……ああ。知っている」

「なら話が早いです」

「ちょっと待って。どういう事なの。全然要領がわからないんだけど」
「察しがわりーな。つまり、そこのキザ野郎は俺達と同じ能力者だって事だよ」
　そう、奈緒樹は言った。
「そう。僕は能力者なんだ……いや、正確には能力者らしいという事だ」
「能力者らしい？　自覚症状がないの？」
「うん。僕の能力は「発火能力」。物を燃やしたり、炎を放てる能力――らしい。だけど、それはわかってない、人から聞いた話なんだ」
「人から聞いた話？」
「覚えてないんだ。僕は。能力を使った前後の記憶が。どこか別の人格があって、それに切り替わるような」
「二重人格だな」
　そう、隼子は言った。
「二重人格!?」
「ああ。普段は眠っている人格が能力を発動した場合、人格が切り替わるのだろう。そして人格が切り替わっている時の記憶は残らない」
「人から聞いた話だと、その時の僕はすごく攻撃的で凶暴らしい。だから怖いんだ、僕は。もし仕事中にその人格が発動したら、もうこの仕事を続けていけないかもしれな

い」
「そ、そんな！　柚咲緒君をテレビで観れなくなるなんて！　そんなのダメダメ！　花子死んじゃうわ！」
　そう、花子は喚いた。熱烈なファンからすれば死活問題なのだろう。
「……それで、君は我々にどうして欲しいのだ？」と隼子。
「僕を止めて欲しいんです。可能な限りでいい。僕の人格が切り替わった時、それを押さえつけて欲しいんです。その為に、この生徒会に入れて欲しい」
「ふーん。そうか。我々生徒会は常に新しい会員を募集している。特に能力者の会員は大歓迎だ。私の名は乙坂隼子。西森君。君を歓迎しよう」
「はい……ありがとうございます」
　西森君は今まで不安だったのか涙ぐんだ感じで言う。感極まるものがあったのだろう。
「有菜、ボールペンと入会用紙を。それから印鑑はないだろうから拇印でいいだろう」
「はい」
　有菜は言われて用意をする。
「に、西森君と同じ生徒会で活動できるなんて、花子。まるで夢のようだわ！」
「ちっ。うざいキザ野郎が入ってくるなんて」

露骨に舌打ちをする友利。
と、その時だった。
「……誰だ！」
隼子は叫ぶ。
「ど、どうしたのお姉ちゃん！　いきなり」
「……今、気配を感じた。誰かが聞き耳を立ててた気配を」
「……まさか。考えすぎじゃない」
「そうだといいんだがな」
隼子の顔付きは厳しい。それがただの杞憂であって欲しいと願うばかりだった。
「・・・・・・・・対象を確認しました。西森柚咲雄です」
暗がりの中、一人の少女が独り言のように呟く。
いや、通信機のようなものを耳につけている。会話だろう。
「・・・・・・・・やはり対象は星ノ海学園に移っていた様子。その他能力者数名を確認。我が機関にとって有益な実験材料（サンプル）となる事でしょう」
そう、不気味な会話が通信機越しに行われていた。

第三話

「くしゅん」
　有菜はくしゃみをした。
「なんだ？　風邪か？」
「う、うん。昨日寒かったからかな」
　そう、生徒会室で有菜は言った。
「へー・・・・・・・馬鹿は風邪を引かないって嘘だったんだな」
「・・・・・・・くっ誰が馬鹿よ。誰が」
　イケメンでも言って良い事と悪い事があろうに。
「どうせお前は能力使ってカンニングしてるから良い点とってただけなんだろ」
「う、うるさい」
　の、能力を使ってカンニングなんて、たまにしかしてないわよ。たまにしか。
　って、あるんかい、と突っ込みが飛んできそうだった。
　本当。友利奈緒希という人間は顔は良いが嫌みな奴だった。
　ともかく、現役のアイドルである西森柚咲雄がこの星ノ海学園に入学してきて、そし

て我らが生徒会に入会したという、激動の一日が終わろうとしていた。
「ねぇ」
その日の事だった。有菜は生徒会で仲の良い高城と一緒にいる事が多い。
その女子生徒の名は三嶋遙といった。気さくで話しやすく、誰とでも仲良くなれそうな、人当たりの良い少女だった。
「高城さん、乙坂さん。この近くにおいしいパフェ屋さんができたのってしってる？」
「・・・・・・・・へー。そうなんだ」
学校の通り道になにやら人だかりのできていた店ができていた事を思い出す。
「それで、パフェが一品無料になるクーポン券を持っていて、もしよかったら一緒にいかない？」
「・・・・・・無料」
タダ。無料。素晴らしい言葉の響きだ。勿論、タダより高いものはないとも言うが。
その日は生徒会の活動もなく、断るだけの理由は存在しなかった。勿論、女子高生からすればスタイルの維持をする上で甘いものは天敵ではあるが、それと同時に甘いものの誘惑というものはいかんともしがたいものがあった。
「高城さん、どうする？」
「いいじゃない。パフェ。私、甘いモノは大好物よ」

高城は満面の笑みでいった。乗り気なようだった。
断るだけの理由を二人は持ち合わせていなかった。
「いらっしゃいませ」
女性店員、煌びやかな制服に身を包んだウエイトレスが多く待ちかまえていた。店内は学校帰りとおぼしき学生で多く賑わっていた。勿論回転間もないという事により物珍しさというのも一因ではあると思うが、大変繁盛している様子。
「ご注文は何にしましょうか?」
ウエイトレスがそう聞いてきた。
初めて入った店だ。何を頼めばいいのか皆目見当もつかない。とはいえ、わかりやすく、おすすめだとか、人気ナンバーワンとか、メニューに書いてあった。無難にそのメニューを注文する事となるう。
「はい。デラックスチョコレートパフェを三つですね、少々お待ちください」
しばらくしてチョコレートパフェが三つテーブル席に届く事になる。
「お待たせしました。デラックスチョコレートパフェ三つになります」
ウエイトレスが次々とパフェを並べる。
「わー。おいしそー」
と、有菜。

早速、一口、口に運ぶ。おいしそうではない。実際においしかった。

「おいしいーー!」

口の中に甘みが広がる。甘みは確かにダイエットの天敵かもしれないが、刹那の快楽に酔いしれる。

ーーしかしである。

「あれ?」

突如、世界が暗転する。意識が朦朧とした。

意識を失う寸前に見えたのは、普段見せていた表情ではない。どす黒い表情。別人のような表情をした三嶋咲子（なんて名前したっけ?）の表情だった。

「・・・・・・・・おかしい」

生徒会室で怪訝な表情をする隼子の姿があった。貧乏ゆすりのように足踏みをしている。

「どうかしたんですか?」

西森が聞く。（どうでもいいんですが作中で本名黒羽で芸名は西森にする意味はほとんどないと思うので西森で統合します。後、隼子の能力はタイムリープだといちいち戻って時間軸を戻してまた書くとなると大変手間ですので適宜に能力変更します。視力を失う設定も同様）

「昨日有菜が帰ってこなかった」
「有菜ちゃんが、どうして？」
「わからん。なんの連絡もなしだ。ＬＩＮＥで連絡をしても既読もつかない」
流石今時の女子高生だ。当然のように情報通信機器を使いこなしている。ＬＩＮＥとか具体名を出すのはどうかと思うがこのまま続ける。
「それから高城はどうした？」
「ああ・・・・・あいつならきてねーよ。学校にもきてないみたいだ。今日、朝礼の時に仲良く欠席してたからな。なにかあったのかもな」
普段と変わらない口調で言った友利ではあったが、その表情には若干の陰りが見えた。態度にはあまり表さないが、彼なりに何かを感じ、心配している様子だった。
ーーと、その時だった。軽快なリズム音が聞こえる。スマートフォンの着信だった。
「私のだ」
見ると、そこには妹である有菜の名前が書いてった。
「妹からだ」
当然のように出るに決まっていた。
「私だ」
（貴様が乙坂隼子か）

「誰だ!?」
　機械的な音声。ボイスチェンジャーで変声したかのような不気味な声だ。
（貴様の妹ーーそれから眼鏡の女は私たちが預かっている）
「なんだと!?」
「どうしたんですか!?　会長」
「・・・・・・なんでもない」
　否定するが、表情の深刻さから何らかの緊急事態である事が容易く汲み取れた。
「要求はなんだ？」
（そこに西森柚咲緒がいるだろう。代われ）
「なっ!?」
（要求を断った場合、貴様の妹のこの眼鏡の女の無事は保証できないと思え）
「くっ」
　圧倒的に不利な立場だ。誘拐をするような卑劣漢の言いなりになるしかないという状況に屈辱を覚えるが、従わざるを得ない。
「西森、代われ」
「はい・・・・・・もしもし、え？　は、はい。わかりました」
　しばらくして、スマホの通信を切る。

「・・・・・・・どういう内容だった？」
「残念ながら、それは言えません」
西森は表情を暗くし、首を横に振った。
「そうか・・・・・・・・」
その表情からもはや会話の内容は汲み取れた。
『一人で来い。誰にも会話の内容を話すな。さもなくば・・・・・・・・』
といったところだろう。
「すみません、僕は行きます」
「待て！　一人で行く気か！」
そうなれば敵の思う壺だった。
「僕は僕のことで、誰かが巻き込まれるのを黙って見ていられないんです」
「西森！」
西森は走り出す。
生徒会室には二人だけが取り残されていた。

第四話

「うっ・・・・・・・ここは」

意識を失っていた有菜は目を覚ます。目を覚まして感じたのはコンクリートの地面の冷たさ、そして胴回りに感じた痛みだった。身動きのできないように縄できつく縛られている。

「目を覚ましたようですね」

聞き覚えのある声。しかし、冷徹で機械的な声色はとても同一人物のものとは思えなかった。

「三嶋さん・・・・・・・・」

隣には高城が眠っている。

「西森くん・・・・だめ、だめです、こんな人気のないところで、むにゃむにゃ、わたし達、まだ健全な高校生なんですから、むにゃむにゃ」

暢気な寝言までたてて、熟睡をしている高城の姿があった。

「高城さん・・・・・」

ある意味うらやましいくらいの脳天気ぶりだった。この非常時に実に緊張感のない

様子。
「た、高城さん！　寝てる場合じゃないわよ！　早く起きて！」
「・・・・・・・ううっ、ここは」
「目を覚まされたようですね。私どもとしてはどちらでもいい事なのですが」
「・・・・・・あなたはいったい。どうしてこんな事をそして、私達をどうするつもりなの？」
　疑問は尽きなかった。
「あなた達の質問に答える義務はない・・・・・・・ですが、答えてあげてもいいでしょう」
　三嶋は語る。表情ひとつ変えずに。
「私達はＥＳＰ開発機関といいます」
「ＥＳＰ？」
「平たく言えば超能力者などの事です。そう、あなた達のような、特別な力を持った人たちの事。私たちはそういった能力者の研究、開発機構なんです」
　今までよりも饒舌に語り始める。
「そういった研究機関は数多に存在します。例えば医療分野などの分野、そういった平和な分野での研究開発機構も存在します」

「あなた達は、どういう目的で研究をするつもりなの？」
「いい質問ですね。例えばハイジャックをしようとしましょう。アメリカの同時多発テロ以降、X線による身体検査は義務となっています。そういった中でナイフや銃火器などの旧来型の兵器は検査に引っかかってしまう。しかし、能力者による能力を規制する事はできません。これってすごい事だとは思いませんか？」
「何となく、あなた達がろくでもない事をしようとしているって事だけは理解できるわ」
「ふふっ。察しがいいですね。私達は能力者の兵器転用を主な研究として行っているのです。どのような状況下でも規制されず、また行動を予知しづらい。我々のような機関によって、能力者とはこれ以上ないというくらい好都合なテクノロジーなのです」
「・・・・・・・それで、なぜ私たちを」
「あなた達は餌なのです。かつてより私たちは次の被験者候補として西森柚咲緒をターゲットとして選定していました。既にこの場所に西森柚咲緒は向かっています」
「どうして、そんなにペラペラと話すの？」
「決まっているじゃないですか」
　嗜虐敵な笑みをもらす。
「あなた達もまた、研究材料なのです。無事に返すつもりはありません。廃人となったあなた達は先程の話の内容など覚えてはいないでしょう。だからどうでもいいのです」

クックック。不気味な笑みをもらす。その笑みは薄気味悪く、不気味で背筋は凍るようだった。

「そんな目的で・・・・・・和私達の学園にあなたは潜入していたの」

「ええ。あなた達の学園は多くの能力者が在学しています。そして今回の西森柚咲尾の転入を受けて、私達は今回の計画を決行する事にしたのです。・・・・・・そろそろおしゃべりはおしまいにしましょう。メインゲストの登場です」

「はぁ・・・・・・はぁ・・・・はぁ」

走ってきたからだろう、彼は肩で息をしていた。

「西森君！　そんな、私（高城）を助ける為に！　こんな危機の中駆けつけるなんて！　なんてヒーローなの！」

私（高城）って。なぜ限定なのだろうか。もはや危機に瀕しているヒロインを助けにきたヒーロー、その感動のご対面といったところだろうか。急速に高城の中で自分が空気化している事に不満を持たざるを得ない有菜だった。

ともかくとして。

「約束通り、一人で来たようですね。感心しましたよ。西森柚咲緒」

「二人は無事か!?」

「ええ・・・・・・無事です。無論、今のところはですが・・・・・・」

「約束通り一人で来たんだ。二人を解放しろ！」
「ええ。その前に、あなたを拘束させてください」
「くっ」
　影から二名程の黒づくめの男達が西森を拘束しようとする。
「クックック。逃げようなんて思うなよ。逃げたら女達の無事は保証できないぜ」
　黒づくめの男達は手錠をもって、じわりじわりと近づいてくる。
　万事休すと思われた。
　ーーだが。
「そのへんにしとけよ」
「誰だ!?」
　誰もいないはずの空間。その場にはいないはずの声だった。冷徹（クール）な印象を受ける少年の声。
　男達は声の主を探す。
　ーーと。高台ーーこの場所はコンテナの倉庫のようだった。誰もいなかったはずの空間より、少年は姿を表す。
「貴様！　何者だ！」
「友利君！」

有菜は叫ぶ。
さらわれたお姫様（ヒロイン）を助けるべく、現れた王子様（ヒーロー）とでも取れるベタな展開だった。
「貴様！　いったいいつの間に！」
男達は身構える。ーーしかし。遅い。
友利が降り立つと同時に首筋に鋭い蹴りが見舞われた。
「ぐあっ！」
男は崩れ落ちる。一瞬で意識が昏倒したのだろう。
「くっ！」
もう一人の黒づくめ男は懐に手を入れた。銃を取りだそうとしたのだろう。
「おせーよ」
しかし、拳銃とはいえ、至近距離ではもはや意味をなさない。
構えるより前に友利の回転蹴りが炸裂する。
「ぐっ、ぐあああああ！」
無様な悲鳴をあげつつ、男は壁に打ち付けられ、意識を失った。
「透明化能力、そうですか・・・・・・・・。あなたも能力者でしたか」
そう、三嶋は言う。

「・・・・・・・くそっ。僕に手を出すだけならまだしも、他の人にまで。うっ！」
「西森君！」
と、有菜。突如、西森が頭を抱え始めた。
「どうした！　キザ野郎！」
「ーー頭が、頭が」
突如の頭痛を訴え始める。
ーーしかし。数秒ほどした後、あっさりと立ち上がった。
「なっ!?」
その表情は別人そのものだった。今まで西森にあった、優しく、穏やかな眼差しは鋭い眼光に変わっていた。その瞳はまるで炎を宿しているかのようだった。
有菜は思い出す。西森のしていた話を。
『二重人格』
その言葉を思い出していた。
「貴様ぁ！」
黒づくめの男は他にもいたようだった。男は適当な鉄パイプをもって襲いかかる。
ーーだが。
流れるような動きと共にかわされ、

「なっ!?」
　こめかみを片手で掴まれた。
「燃えろや。雑魚野郎」
「なっ！　ぐあああああああああ！」
　突如の炎が男の頭部を焼き始める。
「あついっ！　あついっ！」
　手は放されるが、放たれた炎は消えはしない。男は狂ったように転げ回っていた。
『発火能力』
　西森に秘められた能力だった。そしてこの発火能力は二重人格とセットになっているようだ。
　好戦的な表情はいつもの温厚な西森のものとは思えない。もはや理性のタガが外れてしまっているかのようだ。
　三嶋は一瞬驚きを表したが、すぐに冷静さを取り戻したようだ。元々は西森の能力を知っていて今回の誘拐計画を企てたのだろう。驚く程の事ではないという事だった。
「誰だ!?　俺を目覚めさせた野郎は！」
「・・・・・・・西森柚咲緒・・・・・あなたの能力が目覚めたのは予定外でしたが、もういい。こうなったら力付くです」

痺れるような空気だった。
「・・・・・・・いたっ！」
バチッ、という音がした。静電気のようだった。
「組織からは『殺さず連れてこい』との事でしたが、やもうえない場合は仕方ないでしょう。なに、死んでいたとしても肉片からＤＮＡ程度なら採取できるでしょう。もっとも」
静電気はただの偶然ではなかったようだ。幾多もの電流がほとばしり、光を放つ。
「へっ。まさか、てめーも能力者だったとはな」
どうやら三嶋も能力者だったようだ。
発電能力、とでもいえばいいのだろうか。雷を発生させるような能力だった。発火能力と同じ位にありきたりな能力だった。・・・・・・なんだろうか、この少年バトル漫画のような能力バトルもの展開は。シャーロットってこういう作品だったのか。ともかくとして。
炎と雷のせめぎ合いは、例え回りに可燃物がなかったとしても火を回らせてしまう程のものだった。
「や、やばいですよ！　乙坂さん」
高城は叫び始める。そういえば先ほどから熱い。

「って、燃えてる！」
炎がいつのまにか、コンテナ倉庫を覆っていた。一瞬にして灼熱地獄と呈している。
「ちっ。しかたねーな」
落ちていたナイフ（おそらくは黒づくめの男達の物だろう）で縛れていたロープを切る友利。
「ありがとう。友利君」
「別に、大した事はしてねーよ」
ツンデレなんだろう。今はそんな事を気にしている場合ではない。
「急げ。火が回るより前に」
友利はそう言った。
逃げる三人。しかし、高温で体力が奪われたのか、その足取りは思っていたよりおぼつかない。
「急げ！　このままだと！」
その時だった。炎に飲み込まれた柱が倒壊する。
「なっ!?」
万事休す、と思われた。
「起きろ！　・・・・・・いいから起きろ！」

「・・・・・・・・・ここは」

有菜は目を覚ます。そう、最後の記憶だった。柱が倒れてきた。そしてそこで記憶がとぎれた、自分は本気で死んだと思ったが、どうやら助かったらしい。目をあけた時、自分を抱き抱えていたのは自分の姉ーー隼子だった。

隼子の能力は時間を停止する能力だった。時間制限こそあるがこの能力で隼子は有菜を救ったのだった。

「無事か？　有菜」

「ありがとう、お姉ちゃん、お姉ちゃんのおかげだよ。それより、西森君」

「見つかったぜ、あのキザ野郎」

と、友利はいった。

「うっ・・・・・・・・・ここは」

西森が目を覚ました。幸い、外傷はないようだった。炎に対して高い耐性があるのだろう。発火能力者ならば当然だが、自らの炎でやけどを追うわけにもいかないだろう。

「また、僕は・・・・・・迷惑をかけてしまったんだね、本当ごめん」

周囲を見回し、状況を理解した様子だ。本人は人格が入れ替わった後の事など覚えていないようだった。

「そ、そんなことないよ。西森君のおかげで私達は助かったんだから」

「そ、そうよ。そうよ。西森君は私を助けてくれた王子様なんだから」
なぜ私（高城）限定なのだろうか。疑念を抱くが言及している暇はない。
「それより、あの女はどこにいった？」
「死んだとは思えない。恐らくはにげたんだろう」
隼子は言った。
「それより」
消防車の音が聞こえる。
「この場は帰ろう。何かと面倒になりそうだ」
おそらくは誰かが通報したのだろう。放火魔だと思われても面倒だ。もっとも、放火の原因は自分たちにあるから、あながち間違いとも言えまい。
こうして激動の一日が幕を閉じる。
「申し訳有りません。総帥」
真っ暗闇のような空間。不気味な空間の中、三嶋はいた。そこには不気味な男がいた。素顔を見せない、仮面で顔を隠した男だった。
「数多もの能力者をとりにがしました。この失態、死をもって償うより他に」
「もうよい。下がれ。ナンバー１４」
「はっ」

「貴様にはまだ役にたってもらわねばならん。それに、次のターゲットはもう決まっている」
男は写真を投げつける。
そこには静観な表情をした少年が移っていた。
「次こそ、任務を成功させよ。ナンバー14」
「はっ。次こそは必ず」
激動の日々は、まだ終わりそうにもなかった。

第5話

第二章的な何か「乙坂有菜の平凡なようでいて平凡でない日常」

ジリリリリリリリリリ。

それはなんて事のないいつも通りの朝だった。なんてことのない日常。私、乙坂有菜16歳は目を覚ます。目覚めはとても良い方ではない。

「後、5分、後5分だけ、むにゃむにゃ」

そんな定番のような台詞を唱え、長い時間をかけて私は起床した。

私の職業は学生である。そう、花の女子高生である。

平凡な女子高生。そう、平凡な。

と言いたいところではあるが、平凡というには言い切れない。そう、私はある特殊な能力を持っていたのである。その原因はよくわかっていない。私は物心ついた頃からある特殊能力を持ったのである。その能力とは相手に乗り移れる能力。この能力を屈指し、私は成績優秀で頭脳明晰な学園のマドンナ、として君臨していたのである。要はカンニングに使用していたのだ。私は見栄っ張りである。そう。そのくせ怠け者だ。

本当の努力家ならそんなカンニングなどせずとも良い点を取りそうなものである。
　これはそんなどこにでもいる、わけではない私という１６歳女子高生の平凡なようでいて、平凡でないただの日常の話である。
　起床した私は慌てて、身支度を始めた。慌ててパジャマを脱いで、制服に着替える。
「やばっ」
　時間は既に８時を回っていた。遅刻ラインギリギリだった。
　ジリリリリリリリリ。
　私は目覚ましを止めるのも忘れ、
「遅刻！　遅刻！」
　これまた朝のぐーたらな女子高生にありがちな台詞を言い始めた。
　ーーと、私が服を脱ぎ、下着姿になっていた時の事だった。
　ガチャリ。
　唐突に私の部屋のドアノブが回った。
　現れたのは一人の少年だった。活発そうな少年だった。年は中学一年生。少年はパジャマ姿だった。そして眠たそうな顔をしていた。
　彼の名前は乙坂歩（おとさかあゆむ）。何を隠そう、私の弟である。
「姉ちゃん・・・・・・・・」

※注釈ではありますが、男の子で「ござる！」とか言ったりするのはおかしいし、かわいくないのでこの作品中では歩未男バージョンの歩（あゆむ）は標準語をしゃべります。注釈終了。

「ちょ、ちょっと歩！　部屋、入る時はノックくらいしてって言ってるでしょ！　ノック！」

いくら姉弟（きょうだい）とはいえ、異性は異性である。着替えを見られるのは些か恥ずかしいものがあった。

私は制服を重ねて下着姿を隠した。

「って、それより、あんた、なんでそんな格好してるのよ！　もうすぐ学校なのよ。遅刻しちゃうじゃない！」

歩（あゆむ）は星ノ海学園の中等部に通っている。始業時間及び年間のスケジュールは高等部と大差ない。故に歩もまた時間的余裕はないはずだった。

「いいから、うるさいから目覚まし消してよ。近所迷惑だよ」

面倒くさそうに髪をボサボサとかいている歩。

「ちょ、ちょっと！　なにそんなに落ち着いてられるのよ！　私はこれでも優等生で通ってるのよ！　遅刻するわけにはいかないのよ！　遅刻するわけには！」

「何言ってるんだよ、姉ちゃん」

「何って、私は至極真っ当な」
　歩は告げる。
「今日、『日曜日』だよ」
「え!?」
　私の中の時が止まった。目覚ましの音だけが私の部屋に鳴り響いている。そう、これは私、乙坂有菜の平凡なようで平凡でない、そんな日常の記録である。
「・・・・・・・・・くっ」
　仕方なく私は普段着ている私服に着替えた。
「・・・・・・・隼子お姉ちゃんは?」
　私は聞いた。リビングには隼子の姿はない。ちなみにではあるが、両親は遠いところに住んでおり、このアパートというか、マンションに住んでいるのは私たち姉弟（きょうだい）だけである。このマンションから私たち姉弟（きょうだい）は星ノ海学園に通っているのである。
「隼子お姉ちゃんなら生徒会の仕事があるからって朝早く出て行ったよ。そんなの同じ生徒会に所属しているんだから聞かされてなかった?」
「ああ・・・・・・・」
　言ってたかもしれないけど、色々あってぼーっとしてて聞いてなかったかもしれな

い。
「もう、大丈夫？　お姉ちゃん。しっかりしてよ」
「・・・・・・・それが色々あって」
「色々って、具体的に何があったのさ」
「西森柚咲緒って知ってる？」
「あの有名なアイドルの。勿論、知ってるけど」
「そう、その西森柚咲緒が私達の学園に転入してきて、それで。色々、
　そう色々あったのよ本当」
「嘘。あの有名なアイドルがこの学園に！」
　注釈。男のアイドルを男の子好きになるのかな、どうなんだろ。女のアイドルを女の子好きになるのは自然な気するけど、男が男アイドル好きっていうのも、まあ、なくはないのか。歩が西森をアイドルとして好きかどうかの設定はあまり掘り下げない方が無難かもしれない。すみませんちょっと性転換物なかなか難しくて手探りな部分あります。
「そうそう。それで大変だったのよ。色々」
「へー。そうだったんだ。本当に大変だったんだね。それでこれから姉ちゃんはどうするの？」

「せっかく起きたし家にいてももったいないしそこら辺ふらふらする」
「青春を無駄にしてるね、青春を。早く彼氏の一人でも作ってデートにでも行けばいいのに」
「う、うるさい！　ほっとけ！」
　できるならすぐにでも作ってるっつーの。
　私はマイバッグを手にとり、そそくさと自宅から出た。
「まったく、どいつもこいつも」
　私は街中を歩いていた。日曜日だからか、あるいはそういうスポットなのか。あるいは私の自意識過剰だからか、やけにカップルが目につく。
　私だってそう、今はたまたま、縁がなくてフリーなだけで。縁やきっかけさえあればすぐに彼氏位できるもん。
　ーーと、その時だった。
「はーい。彼女」
「かわいいね」
「よかったら俺達とお茶しない」
　そんなテンプレ通りの台詞をはいて三人のチャラそうな男達。通称チャラ男が姿を現す。

明らかに今まで数打てば当たるで適当に声をかけてきたというだけの事が伺えた。そんなに私はチョロそうに見えるのだろうか？　いくら、私が今現在絶賛フリー中の身とはいえ。それでも相手に対する許容範囲というものがあるだろう。いくらなんでも、このような下半身で生きているような男達など、こちらから願い下げである。

「ちょっと、忙しいで」

「ちょっと待てよ」

ガシッ、男の一人に肩を掴まれる。

「お姉さん、どうせ彼氏いないんでしょ。さみしーそうな顔してるもん」

ぐっ。ず、図星をつかれた。

「そうそう。そんな寂しいお姉さんも俺達と遊べばきっと寂しくなくなるぜ」

「とっておきの店知ってるんだよ。すっげーおしゃれで。なっ、だから俺たちと」

「くっ！　し、しつこい！」

ーーと、その時だった。

「乙坂、お前なにやってるんだ」

見慣れた声。そして顔だった。友利奈緒希である。当然のように今は私服ではあるが、ジーンズにダボダボとしたパーカーを着ている。

偶然ではあったが、この偶然を活かさない手はない。

「ダーリン（ハート）」
　私はとびっきりの甘い声と笑顔で友利の腕に抱きつく。
「なっ!?」
「ど、どこいってたのよ！　待ち合わせの場所間違えて。有菜ずっと探してたんだから」
「な、なにいってんだよお前！」
　こいつ、抱きつかれたら明らかに動揺している。意外にシャイなのか。かわいいところがあるじゃないか。
（いいから）
　私は耳打ちする。
（いいから話合わせてよ。こいつらしつこいのよ）
（こいつら・・・・・・そういう事か。ちっわかったよ）
　友利は渋々だが合わせてくれたようだ。
　作者注釈。なんとなくジャンプのニセコイみたいな感じだ。どうでもいいけど。
「ハニー。ずっと気味を探してたんだよ。どこにいってたんだ。マイスイートハニー」
　満面の笑顔で言う。
「ちっ。コブつきだったか。次いくか、次」
「ああ。仕切り直しといこうぜ」

ナンパのセオリーは数である。数。望み薄だとわかればそれ以上深追いはしないだろう。男達は新たな獲物を

「おい」

「な、なに」

「いつまで腕にくっついてるつもりだ。もういい加減いいだろ」

「ご、ごめんっ！」

私は友利の腕から離れる。

「・・・・・・・・それで、おまえはどうしてこんなところにいるんだ？」

「そ、それは暇だからぶらぶらと。友利君はどうしたの？」

「俺は別に・・・・・・・・・面白い用事じゃねーよ、別に」

「面白くない用事？」

「ああ・・・・・・・少なくともお前にとってはな。それでも暇を持て余している、っていうなら一緒にくるか？」

友利はそう言った。

私は頷く。面白くない用事だったとしても、一人でいるよりは恐らくはずっとマシな休日になる事だろう。そう思ったのだった。

私は友利君から行き先を教わってなかった。ただ彼の行く先に従っているだけであ

る。電車を乗り継ぎ、バスに乗り、そしてたどり着いた先にあったのは郊外にある、大きな総合病院だった。清潔感のある建物の中に入っていく。

何となく、私はこれからどこへ向かおうとしているのかを理解しつつあった。

その病室には「友利一美」という表札に書かれていた。聞いた事がある、友利君にはお姉さんがいて、そのお姉さんは今入院中らしい。間違いなく、この病室に友利君のお姉さんがいるのだ。

注釈。原作では、友利の兄は廃人状態ですが、小説で廃人を書くとその場に全く存在しないような空気みたいな存在になってしまう為、この作中内では人体実験により一時廃人状態だったが現在は日常会話程度なら可能であるが、下半身不随の為退院する事はかなっていない、程度の症状と設定します。注釈終了。

コンコン。

ノックの後、友利君と私は病室に入る。そこには長い髪の女性がいた。彼女は窓辺から景色を見てたそがれているかのようだ。他にやる事もないし、退屈しているという事もあるだろう。すぐ近くに車椅子が置かれている事から、彼女の足が不自由である事は容易に察する事ができた。

彼女が友利君の姉なのだ。名前は表札に書いてあった。一美というのだろう。「友利一美」それが彼女の名なのだろう。

「姉さん・・・・・・」
「あら。珍しいわね。奈緒希君が女の子を連れてくるなんて」
彼女は穏和な笑みを浮かべる。
「もしかして、彼女できた？」
「ち、ちげーよ。なんでそんな話になるんだよ」
「まっ。そうなの。自慢の弟だから、ついに彼女の一人や二人できたものだと思って喜んだのに。なんだ、違うんだ」
いやいや。二人目っていうのはちょっと。浮気相手。
「こいつは同じ生徒会の一員だ。それ以上でもそれ以下でもねーよ」
そっけなく言われる。その言い方はその言い方でなんていうか、女の子としていしきされてないようで傷つくといえば傷つく。
「はじめまして。乙坂有菜ともうします」
「はじめまして。奈緒希の姉で、一美といいます」
「はじめまして、一美さん」
「はい。はじめまして。けど遠い中、わざわざありがとう。私のお見舞いになんて付きあわさせちゃって。退屈でしょう」
「い、いえ。そんな事ないですよ」

どうせ家にいても退屈で暇を持て余していたのだ。基本的にぐーたらな私は。勉強や部活動にいそしむタイプでもない。怠惰な女子高生として、適当にぐーたらな休日を過ごしてた事だろう。

結局、その場は適当な日常会話をしてお見舞いは終わった。

本人がいる前では色々と話しづらかった。とはいえ、こちらから聞くわけにもいかなかった。友利君が話したくなければそれでいい。その話題には触れない方がいいだろう。

「姉さんは元々は能力者だったんだ」

「え？」

能力者として生まれるかどうかには遺伝的形質が大きく影響する。原理は私もよくわかっていないのだが、兄姉、姉妹で能力者として生まれてくる事がよくあるのだ。私と隼子お姉ちゃんがそう。歩に関しては私もよくわかっていない。

「お前達を拉致った組織。ああいう組織に今より幼い頃に捕まって、それで姉さんは研究材料にされたんだ」

「・・・・・・・なんなんだ」

思っていた以上の重い話に、私は絶句する。もし助けがこなければ私もそうなっていたに違いない。いや、それどころか、あんなことやこんなこと、全年齢版では表現でき

ないようなＲ１８展開になっていたかもしれない。
「数年間の実験の末に、姉さんは保護された。その時の姉さんは廃人同然で当時は一言も言葉をは話せなかった。奴らにどんなひどい実験をされていたのか、想像もつかない。このまま話せないままだったと思った。だけど姉さんは奇跡的に回復した。何とか日常会話ができる程度までは回復したんだ。今ではああやってたまに笑顔を見せるし、冗談を言ったりする。けど、後遺症は残った。姉さんの下半身は不随したままだ。医者が言うには一生治る事はないらしい」
「・・・・・・・そうなんだ」
　それを聞いて、私はなんと言えばいいのだろうか。言葉を紡ぐのは難しい。
「退屈な用事な上につまんない話まで聞かせちまったな」
「い、いいよ。別に」
「この話、他の奴には話すな。余計な心配はかけさせたくない」
「う、うん。わかった、他言しない。約束する。け、けど、どうして？」
「ん？」
「なんで、私なら話していいと思ったの？」
「別に。何となくだよ。何となく。ただお前なら話しやすかった、それだけの事だ」
　彼なりに何か背負っているのだ。話す事で少し肩の荷をおろせた、それだけの事だろ

う。

「帰るか。病院なんていても辛気くさいし、仕方ないしな」

「う、うん」

こうして、私、乙坂有菜の平凡なようで平凡でない休日は終了した。

第6話

「・・・・・・・来たか」

その日、私は生徒会長である姉、隼子に呼び出された。

「一体、何の用なんだ？」

生徒会室の机には地図が広げられている。

「・・・・・・・黙って待ってろ。そろそろ来る頃だ」

バタン！

生徒会のドアが突如開け放たれる。

「なっ!?」

無言で入ってきたのは一人の髪の長い女子生徒だった。顔を覆い隠すように髪が伸びており、表情が見て取れない。

というか、髪が塗れていた。水浴びでもしていたというのだろうか。

不気味な幽霊のような女性に映る。

「彼女の名前は熊耳。我らが生徒会のメンバーだ」

「へ、へー。そんな人生徒会にいたんだ。知らなかった」

文字通り幽霊部員、いや幽霊のような部員だった。生徒会だから正確には会員か。；

「能力は、念動力」

彼女は水滴を地図に垂らした。

な、なにいってんのこのひと。

そしてそのまま去っていった。

「そうか・・・・・・・場所はここか。ここは近くの学校だな」

水滴が落とされたのは近隣の進学校だった。

「あの、お姉ちゃん、あの人一体、何してったの」

「熊耳。彼女も我々と同じ能力者だ。能力は探知系の能力。戦闘にこそ使えないものの、能力者を見つける事ができる。便利な能力だ」

「はぁ・・・・・・・」

それと水に濡れていた事となんの関係があるのか。そうしないと発動しない能力なのか。

ともかくとして。

これから一体どうするというのだろうか。私にはわけがわからなかった。

○○学園。（原作で乙坂が通っていた学園の名前なんていうんだっけ。忘れた）文武両道で有名な進学校である。共学。

そこは弓道場だった。精悍な顔つきの美少年が、弓道姿で弓を構えている。少年は弦を引っ張る。限界まで引っ張り、狙いを定めた。それは神聖な空気にすら感じられ、何者にも邪魔する事は許されない空間、静寂に支配された空間。精神を集中させ、その一矢を射る。正確無比な一矢は見事なまでに的の中心を射抜いていた。それと同時に、ギャラリーの弓道部員、それどころか弓道部意外の生徒達も、彼の一挙一動を見守っていた。命中と同時に、割れんばかりの拍手が鳴り響く。

彼の名は白柳弓矢（注釈、説明するまでもなく、原作でいう白柳弓の男バージョン）成績優秀、容姿端麗、運動神経抜群、特に弓道の腕はプロ並で全国大会での優勝軽々もあるそうだ。その甘いマスクもあり、〇〇学園のプリンスと他校にもその名は知られわたっている。

注釈。弓道部の主将、野球の試合、念動力、白柳弓、あたりの原作の設定は適当に混ぜて、消化します。そのあたりを混ぜた感じで話すすめます。注釈終了。

ーーそんな中、その様子を影から見ている怪しげな人物達が四名程いた。そう。星ノ海学園の生徒会のメンバーである。

しかし、その格好は普段の制服の格好ではない。〇〇学園の制服である。恐らくは潜入の為に変装しているのだろう。

「・・・・・・・しかし、本当にあいつが能力者なのか？」

「間違いありません」
と、西森。
再度、白柳が弓を射る。その時だった。コンマ数センチのぶれ。
しかし。白柳の学校が怪しく光ったように感じた。間違いない。能力を使ったのだ。
数センチのぶれは、熊耳の探知が正確だったのだとすれば念動力（サイコキネシスとも言う）により修正された事になる。恐らくはよほど動体視力のいい人間が注視しなければその違和感には気づかなかった事だろう。
またもやど真ん中に命中した矢に喝采が起こる。
「元々の弓道の腕がたしかな上に念動力（サイコキネシス）でずるをすれば全国大会で優勝する事も容易い、か」
友利は淡々と言った。
「・・・・・・・それで、これからどうするんだ？」
「我々の目的は能力者の保護だ。能力者は先日のような機関により、危害を加えられかねん」
そう、隼子は説明する。
「・・・・・・・保護っていっても」
四六時中監禁でもするのか。ペットでもあるまいに。一人の人間をずっと監視下に

置くのは困難極まる。
「・・・・・・・なに。それについては考えがある。とりあえずは奴を誘い出す必要がある」
「誘い出す、ってどうやって?」
「我々は花の女子高生だ。その立場を利用すれば容易い」
隼子は微笑んだ。
手には便せんがひとつ。
「思春期の男子高校生を呼び出す事など造作もないさ」
何となく、嫌な予感がする私だった。
翌朝の事。白柳は登校した。そして下駄箱をあける。するとそこにはかわいらしい便せんがあった。とりあえずは中身をみる。
「・・・・・・・これは」
差出人は不明。文面はこうだ。
「ずっと前からあなたの事が気になっていました。大事な告白があるので今日の放課後、部活が終わる時間帯に屋上で待ってます」
典型的なラブレターだった。
そこは〇〇学園の屋上だった。

「・・・・・・・・なぜ屋上なんですか？」
　物陰から生徒会メンバーは事の成り行きを見守っていた。
「・・・・・・・・告白の定番といえば屋上だからだ」
「告白って」
「なぜ、有菜さんが表にたたされているんですか？」
「なに。私が告白した事にして本気にでもされたら面倒だろう」
　当然のように先ほどのラブレターは仕込みである。
「だからって妹を犠牲にしていいんですか」
　西森はあきれたような顔をする。
「高城さんという選択しもあったのでは？」
「それは・・・・・・・・」
　隼子は高城の顔を横目でみる。
「・・・・・・・・相手が不憫だろう」
「む、むきっ！　なんですかそれは！　失礼です！」
「しっ。黙ってろ。ターゲットがきたぞ」
　お姉ちゃんもとんでもない事するなぁ。妹の気も知らないで。
　私はそう思った。

そうこうしているうちに、目的の人物。白柳弓矢が屋上へと来た。あんな差出人も書いていない手紙に律儀に対応するなんて。だましているこちらとしては心が若干痛む。
「・・・・・・・君かい。朝、僕の下駄箱にこの手紙を入れたのは？」
「は、はい。そうです」
「驚いたな・・・・・・・まさか君みたいなかわいい子が僕に手紙を」
まんざらでもなさそうだった。これは喜んでいいのか？　果たして。
「けどおかしいな。君みたいな子、うちの学園にいたかな？」
ギクッ。確信をつかれる。
「わ、私、影薄いから。それに、最近転校してきたばかりだし」
適当な事を言ってごまかしておいた。
「そうなんだ。それで、どうして、僕の事を？」
「それはーー」
どう話を合わせていいものか。
「し、白柳さんの弓道をしているところが素敵で、それで」
適当に無難な事を言っておく。頬を赤らめ、もじもじとした仕草をする。いかにも告白して恥ずかしそうな女子を演じる。全て計算の上の事だった。
「う、嬉しいな。けど、ごめん」

白柳は頭をさげる。
「・・・・・・・僕は勉強と部活で手一杯なんだ。今度弓道の全国大会があるし、とても恋愛に時間と気力を割いてられないんだ」
「・・・・・・そうなんだ。こちらこそごめんなさい」
なんだろうか。安心したけど、なんだか心が痛むような。
「さて、青春学園もののような展開はその程度にしてもらおうか」
「誰だ！」
物陰から生徒会メンバーが姿を現す。
「なっ。人の告白をのぞき見るなんて悪趣味ですよ」
「悪趣味なのはのぞいていた事だけではない、この告白自体が仕組まれた茶番だからだ」
と、隼子。
「なっ！」
白柳君は私をみる。
「そ、そうなの？　この告白は君達のやらせだっていうのか」
「う、うん。そうなの、ごめんね」
「なんだ・・・・・・・罪悪感を感じていた自分が馬鹿みたいじゃないか」
白柳君は落胆したようだ。

「それで、こんな悪趣味なまねしてまで僕を呼び出して、一体何をしたいんだい？」
「・・・・・・・白柳弓矢。貴様が能力者だという事を我々は既に知っている」
「なっ!?」
「しかもその能力を弓道に利用している事もな。ずるをして勝ってもスポーツは楽しくない。何よりもおまえ自身が罪悪感を覚えているのではないか？」
「そ、それはーー」
白柳はどもる。
「それだけではない。能力を利用していれば機関に目をつけられる事になる」
「機関？」
「あたまのおかしい連中だ。お前も人体実験にかけられるだろう。自我を失い、廃人同然の余生を過ごす事になる。貴様のしている事はリスキーな事だ。今後は普通の人間として生きろ。それがお前自信の為だ」
「嫌だといったら？」
「勝負をしようじゃないか。それでお前が勝利すれば今後二度と能力を使わないと誓え。我々が負けたら見逃そう」
「勝負？」
「貴様の得意な弓道で勝負しようじゃないか」

　隼子は微笑んだ。
「勝負は一回限り、的に近いほうが勝ちだ」
　夕暮れ時。人気のない弓道場。
「お、お姉ちゃん、大丈夫なの？」
「なにがだ？」
「わたしたち、弓道なんてした事ないよ」
　袴姿に私たちは着替えていた。
「・・・・・・そうだな」
「それでどうやって勝つっていうのよ」
「心配するな。必ず勝てる」
　隼子は言った。
「それで、誰が僕の相手をするんだ？」
　白柳はそういった。
「そうだな、じゃあ、じゃんけんでもするか」
「じゃんけん？」
　そんな適当でいいの。
「じゃんけん、ぽん」

じゃんけんの結果私が負けた。
「それじゃあ、有菜、お前がやれ」
隼子はそういった。
「けど、どうやって」
「適当に引っ張って放せ」
「け、けど」
「いいから」
「はい」
私は適当にうって放した。
当然のように、大きく的をはずした。
「大外れでやんの」
と友利。
「それじゃあ、僕の番だね。悪いけど、僕が的をはずす事は絶対にないよ」
白柳が弓を構え、弦をひっぱる。そして、矢を放とうとした時だった。
「いまだ！　有菜！　乗り移れ！」
「わ、わかったお姉ちゃん！」
「なっ!?」

私は乗り移った。
矢は放たれる。大きく外れた。私は元に戻る。
「なっ！　き、汚いぞ！　能力を使うなんて！」
「・・・・・・・そうだ。汚い。だが、それはお前もしていた事だろう」
「な、それはそうだけど」
「自分自身、わかったはずだ。能力を使ってずるをして得た勝利など意味がないという事を」
「なっ」
図星をつかれたようだ。
「わかったなら金輪際能力を使うな。それが貴様のためだ」
隼子はそう告げた。
白柳はうなだれた様子だ。